

2014 後期 9 「個別情報」の意義 和本は1冊ごとに違う
 はしぐち こうのすけ
 橋口 侯之介

和本を調査するカードの記入法

簡潔に記述する。デフォルトは記述しない。逆に特殊な事例は詳細に記す。貴重書かどうかの価値判断もすること

個別情報	⑯ 印記 (蔵書印) ※ (その他の印) ※
	⑰ 書入※
	⑱ 保存状況
	そのほか

基本情報・形態・位置情報によって本の書誌情報は基本的にできている。しかし、和本のように長い伝来を経たものは、その課程でさまざまな変化を見せる。現在残っている和本はどれひとつとっても同じではない。写本に至っては始めから同一ではない。

単に古くなるだけでなく、所蔵者の変遷、書入の有無、造本の変更など、元の本とは様相の異なることが多々起きる。

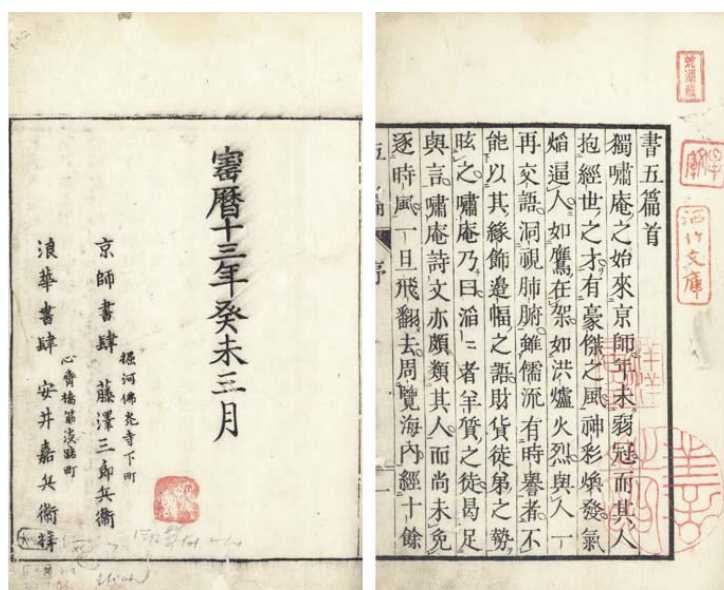
そのバリエーションは、基本的な書誌情報を超えて、全く別の本であるかのような様相を帯びることもあり、大きな価値を生み出すこともある。ここまでデータをとらないと本の完全な情報にならない。

各種目録の不備

愛知県西尾市の岩瀬文庫では、全点の再調査(悉皆調査^{しつぱい})をおこない、目録の作り直しをしている(インターネットで公開)。

昭和11年に刊行された『岩瀬文庫図書目録』(同文庫刊)でおよそ12000点の目録はできていたが、「個別情報」が欠けていたために、せつかくの本が埋もれてしまっていた。新たな調査で、多くの善本・珍本が再発見された。

その一部を、塩村耕『こんな本があった！ 江戸珍奇本の世界』(家の光協会、2007)でも紹介している。現在も積極的に本を公開している。



個別情報の見どころ

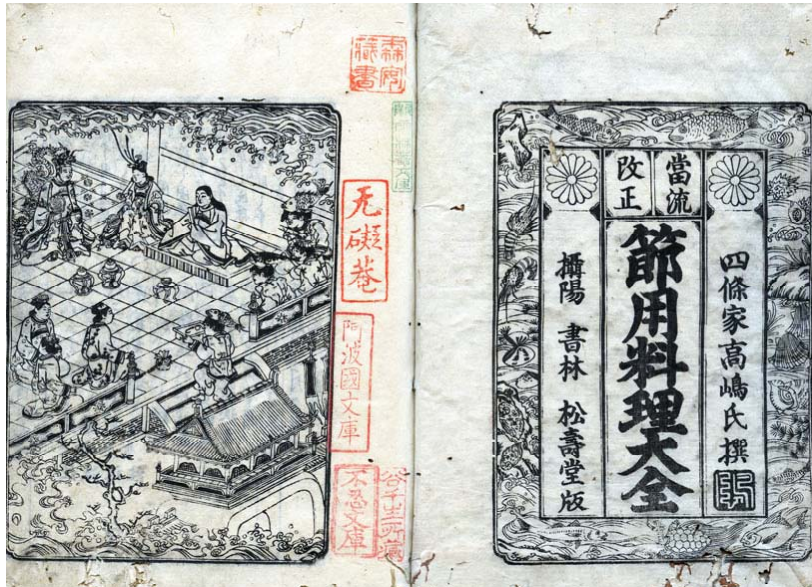
1. 旧蔵者がわかる 蔵書印、識語(しきご)

印影を読むのは難しいが『新編蔵書印譜』(日本書誌学大系、増訂版2014年)で調べる。

印でなく言葉で所有情報などを記すのを「識語」という。その内容も重視。貸本屋印というものもある

2. 書き入れの有無
訓点や句読点、校合(きょうごう)、朱引(しゅびき)、標柱

これによってまったく別の本の様相を帯びることもある。本を成長させる



3. 保存の状態と修復

汚れ、傷み、虫による紙の浸食、ネズミの害、しみ、書き入れとはいえない落書き、落丁・乱丁、破れ、スレ……。

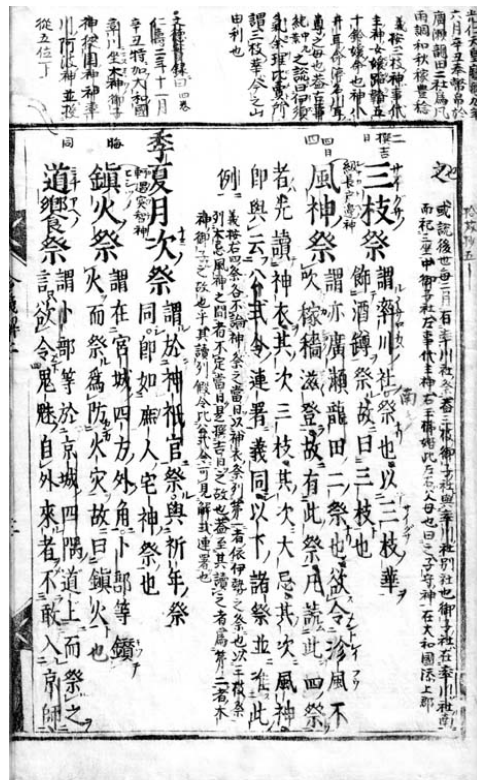
その程度も、甚だしいのか、一部がそうなのかによって異なる。

永年の伝存で、旧所蔵者や古本屋などの手で修復(メンテナンス)も行われる。

裏打ちなどの補修、替表紙、替題籤、合本などの改装など。

時代による劣化(日焼け)や糸の切れなどは仕方ない。逆にそうした欠点がなければ、「美本」といってもよい。

いずれも書誌学の用語に無い。



2. 紙質の違い

上等な本は良い紙を使う。薄様も上等な本に入る。

上等な紙とは、同じ楮系でも紙の厚さや目の細かさなどで比較される。

薄様は、雁皮紙のものが多く、通常の本の厚さより三分の一くらいになる。

並の本に対して極上に仕上げた献上本、特製本など。少し大ぶりになる。

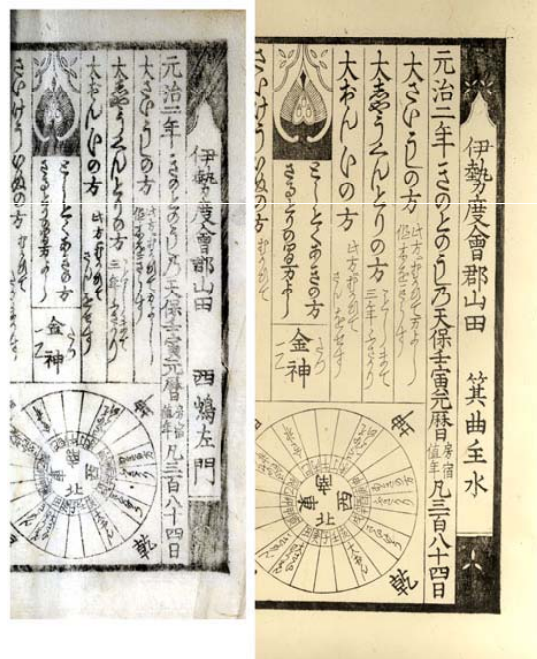
『伊勢暦』の種類。紺紙金泥表紙・見返し金が最上等。次に二、三番目の特製があり、良好な刷り。普通品は楮紙。→

版面は特製が207[㍉]、並製が190[㍉]。板元も別。

箱や帙にしまうのも、本屋が販売用につくったものと、個人が作成したものがある。

5. 写本の草稿と写し

岩瀬文庫でみつかった善本には、たんなる写本としか情報のなかった本の中から、現著者の草稿本であったり、同じ写しても、著名な学者のものだったりといった発見が続いた。板下本が見つかることもある(右下図)。

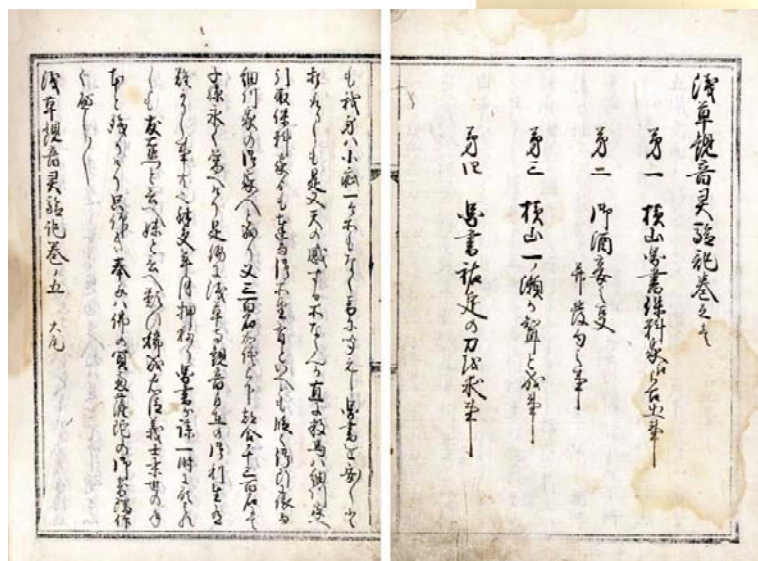


6. そのほか

挿絵に色をつけることもある。プロの仕事と素人のいたずらがある。

江戸時代初期には、わざと丹色と緑色で簡単な色づけをした。「丹緑本」といって珍重される。江戸時代後期になると、多色刷りが多くなる。

巻末に出版目録があるもの。葉の広告が入っているもの、など特殊な事例も個別情報である。



「良い本は、よく保存されている」=これは原則。

参考文献

『和本入門』 pp206-210 「書き入れにも作法がある」
 『江戸の本屋と本づくり』 pp219-250)